

〈原著〉

フランシス・ベーコンの“生と死の自然誌”における 生活の組織化と感情の管理による長生

藤 井 義 博 (藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科・藤女子大学大学院 人間生活学研究科 食物栄養学専攻)

本研究の目的は、英国の哲学者フランシス・ベーコン（1561-1626）の“生と死の自然誌”（*Historia Vitae et Mortis*）における生活の組織化と感情の管理による長生の特徴を明らかにすることにより、それが現代の人生の諸問題への新たな展望になり得ることを指摘することであった。生活の組織化と感情の管理による長生は、ベーコンの長生の実現のための3つの意図を実現するための10のオペレーションのうち、第1の意図である消耗の禁止を実現するための第1のオペレーションすなわち嗜好を持つ物としてのスピリットが力を回復するためのスピリットへのオペレーションである。生活の組織化は、身体の中のスピリットの状態を察知し、その嗜好を考慮して実施する認知的行動である。感情の管理は、スピリットの嗜好にそぐわない強すぎる感情を回避することである。ベーコンのスピリットのための生活の組織化と感情の管理は、精神と身体を峻別する心身二元論にも身体機械論にも基づくことなく、むしろ人間の内発的な主体性に基づいていることから、現代の諸問題とりわけ燃え尽き（burnout）など心身にまたがる人生の諸問題への新たなアプローチになり得るものと思われる。

キーワード：生活法、スピリットの嗜好、認知的行動、心身二元論、内発的な主体性

1. はじめに

英国の哲学者フランシス・ベーコン（1561-1626）の著作“生と死の自然誌”（*Historia Vitae et Mortis*）に記された長生のための生活法（以下、長生法と呼ぶ）は、西洋近代医学草創期に活躍したドイツの医師クリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラント（1762-1836）に大きな影響を与えた。そしてフーフェラントによる一般人のための著作“人が長生きするための技法”（1795）は、出版直後から好評を得て版を重ねあらゆるヨーロッパ語に翻訳され、19世紀の大ベストセラーとして彼の死後も出版され続け後世にも大きな影響を与えた^{1),2),3)}。一方、ベーコンの“生と死の自然誌”は、英訳があるものの元々はラテン語で書かれていることもあって、現在に至るまで一般人にはほとんど知られていない。ベーコンの長生法は、人間のスピリットへのオペレーションを含んでいる。このベーコンのスピリットは、人間の内部に存在して嗜好を持っている物という意味において、人間に内的価値をもたらす物と把握することができる⁴⁾。

本研究の目的は、ベーコンの“生と死の自然誌”における生活の組織化と感情の管理による長生の特徴を明らかにして、それが現代の諸問題とりわけ心身にまたがる人生の諸問題への新たなアプローチになり得ることを指摘することであった。

2. 資料と翻訳

フランシス・ベーコンの“生と死の自然誌”（*Historia Vitae et Mortis*）および“自然と実験の自然誌”（*Historia naturalis et experimentalis*、以下“自然誌”と略）のテキストとして、THE OXFORD FRANCIS BACON・XII（Director: Graham Rees, Oxford University Press, Oxford, UK, 2007.）を用いた。これらは、ラテン語の原文と対訳の英語訳からなる。そして“生と死の自然誌”から引用をするときは、(HVM)で示しかつ続けて引用ページないしは引用する規範（rule）あるいは規範のベーコンによる解説の番号を示した。また“自然誌”から引用をするときは、(HNE)で示しかつ続けて引用ページを示した。

上記の資料からの引用の日本語訳は、すべて著者による。

本論文においては、*Historia Vitae et Mortis* は、上記したように、“生と死の自然誌”と訳した。前著⁴⁾では、“生と死の話”と訳しているものである。本論文における表記のほうが原文のニュアンスをよりよく保っていると判断したために、本論文ではこのように表記を改めた。

3. “生と死の自然誌”を繰上げて刊行したベーコンの意図

“生と死の自然誌” *Historia Vitae et Mortis* (1623年刊行) は、フランシス・ベーコンの6つのパートからなり、諸科学の復興を意味する“*Instauratio magna* (偉大なる復興)”において、諸科学の再構築に必要な自然誌のデータを集積したパート3 (試行され検証された自然誌：*Historia naturalis et experimentalis*) に含まれているものである。

パート3の始めにおいて、ベーコンは1620年に刊行した“新オルガノン (*the Novum Organum*)”の計画と目的を評価するヨーロッパの有能な知識人達が、種々の“自然誌”によって検証し推進することで新しい哲学を身につけることの重要性を表明し、「私の“オルガノン” (訳者注：“新オルガノン”：*the Novum Organum* のこと) は、“自然誌”なくしては“諸科学の復興”を進めることができないし、“自然誌”は“新オルガノン”がなければそれを促進できない」と述べている (HNE 13)。

さらに“生と死の自然誌”の前置きにおいてベーコンは、当初は生と死の自然誌を、*Instauratio magna* (偉大な復興) パート3において計画した6つの月刊の自然誌リストの最後に置いていたものの、わずかの時間の喪失が貴重である事物の例外的な有用性に鑑み、それを前倒して (訳者注：“風の自然誌”に次いで) 2番目にすることを決意したことを述べている。そしてその決意の理由を、「なぜなら私はそれが多くの人々に役立つこと、及びより傑出した医師が、心を幾分高揚させて、報酬目当ての治癒に没頭して必然だけからの信用を獲得しないで人の長生と人生の若返りにおける神の全能と慈悲の召使いとなることを、とりわけこれが未試行であるものの、安全で (safe) 便利で (convenient) 市民生活にふさわしい (civil) 方法で達成されるように、切望するからである。なぜなら我々キリスト教徒は、常に約束された地を渴望するものの、この世の荒地における我々の巡礼において靴と衣類 (すなわち我々の虚弱な身体) ができるだけだめにな

らないならば、それはまた神の恩寵の徴であろうからである」と説明している (HVM 143)。

このようにベーコンは、諸科学の再構築という彼の哲学のプロジェクトの計画と目的を示す“新オルガノン (*the Novum Organum*)”と実際の検証・推進方法を具体的に示す“自然誌”とが車の両輪となることで、彼の新しい哲学が人々の身につくように働くことを意図した。そして“自然誌”のなかでもとりわけ人の長生と若返りについての“生と死の自然誌”が、人々のキリスト教徒としての市民生活に役立つことから、医師たちがその自分勝手な臨床診療習慣を脱し、従来黙してやり過ごしてきたこの真に必要なテーマに真摯に向き合うことを求めた。この意味において、1795年、34歳のときに一般人のために著作“人が長生きするための技法”を刊行したドイツの医師クリストフ・ヴィルヘルム・フーフエラントは、このベーコンの要請に応えた稀有な医師であったということができよう。

4. ベーコンにおける医学と長生法の区別

ベーコンの“生と死の自然誌”は、記述スタイルの異なる前半と後半の2部からなる。自然誌的叙述からなる前半に対して、後半は長生と死の形態に関する全32の規範 (rules) の表明とそれぞれの解説からなる。規範として表明する理由について、「規範 (しかしただ暫定的なものである) すなわち探究の過程で浮かび上がってきた不完全な公理であって法則を定立する意図を持たないもの。なぜならそれらは全くの真実でないにしても役に立つものであるから」とベーコンは説明する (HNE 15, 17)。

ベーコンは、病気 (illness; *morbus*) の治癒は一時的な医薬 (medicines) を要するが、長生は生活法 (diets) から探す必要があると述べる (規範 30)。これは、“生と死の自然誌”の目的である人の長生と若返りが、生活法としての課題であることを示している。生活法 (diets) は、医学の父と言われる古代ギリシアのヒポクラテス医学の治療法を表現する *diata* (生き方すなわち生活法) に遡る⁵⁾。この生活法は、疾病の治癒を目指す医学の治療法の一つであり、その意味において、一般原則としてではなく、疾病及び患者との関係で個別的に特定される治療法を意味した。

これに対してベーコンの生活法は、個別的に特定される治療法ではなく、人の長生と若返りを目的とする長生の採るべき一般原則である。「偶発により到来するものは、その原因が消されれば止む。ところが自然の不断の経過は、うねる河のようであり、流れに抗し

て漕ぎ続けることや帆走することが必要である。それゆえにわれわれは一般原則 (a general rule) として生活法によって働くことを余儀なくされている」と説明する (規範 30 解説)。生活法を一般原則とした理由についてベーコンは、「私は、種々の療法 (remedies) を個々の意図 (intentions) に従って展開し、それらの選択と処方 (ordering) については述べないこととした。なぜなら種々の体格、種々の生活様式、種々の年齢に最適のものを厳密に処方したり、療法の順番や生活法全体を計画して管理することは、完遂するには時間がかかりすぎて、公表するに値しないと思われるからである」と述べている (HVM 243)。実際、ベーコンは、3つの意図 (intentions、処置計画) すなわち消耗の禁止、修復の完遂、老化現象の刷新を 10 のオペレーション (operations、術、一連の手順) に展開することで、人の長生を実現しようとした。

規範 30 では、病気の治癒は一時的な医薬 (medicines) を要することが述べられている。この表明から、ベーコンは病気を現代の生活習慣病のような慢性疾患としてではなく、感染症等の急性疾患と把握していたことがわかる。

病気は、古代ギリシアのヒポクラテスの時代から、現代の急性感染症など発熱や発疹など症状と徴候が比較的明瞭な急性疾患が想定されてきた。なぜなら生活習慣病などの慢性疾患は、症状や徴候が不明瞭なために老衰から明確に区別することもまたそれを治癒に導くことも容易なことではなかったからである。そうするとベーコンにおける長生のための生活法の対象者は、(ときどきの急性疾患を除くと) 無病息災の健康人だけではなく、生活習慣病などの慢性疾患の患者をも含むものであったと推定される。このように規範 30 は、慢性疾患の患者を含むすべての人々の採るべき生活法を、偶発が招く一時的な急性疾患に対する従来の生活法から区別している。

ベーコンはその規範の解説において、疾患 (訳者注: 急性疾患) における医薬は、自然を逆転させ得る効力を持つゆえにより強力でありより厳然とした変化を引き起こすものであるが、それは生活法であることを述べている。この薬物療法は生活法であるというベーコンの表明と比較すると、近代西洋医学における薬物療法の認識は現代に至るまで、生活法の枠外にあることに気づかされる。このことは、薬物療法を発展させてきた近代西洋医学の学識は、西洋の長い生活法の歴史とは無関係に近代以降発展してきた自然科学の学識であることを物語っている。

ベーコンによる長生のための生活法は、日々用いる通常的生活法である。そして最も効果がある生活法の

中にベーコンは、感情の管理 (management of the affections) と観想の多様性 (the variety of one's studies) を含めている (規範 30 解説)。この包含は注目される。なぜなら身体の長生のための感情の管理や観想の多様性は、精神生活の在り方にかかわるからである。

現代の多くの医師や科学者は、科学的な研究における対象の着想を、デカルト (1596-1650) の身体と精神を峻別する心身二元論に負っている。この心身二元論は、身体と精神が独立した各個の物質であり、それぞれが必要な相互の関係から切り離されてそれ自身の固有の権利において存在するという仮定である。この心身の仮定においては、感情の管理や観想の多様性という精神生活が身体に影響を及ぼすという想定自体が成立しない。一方、ベーコンにおける感情の管理と観想の多様性は長生の実現のための 3つの意図と 10 のオペレーションの中で、第 1 の意図 (消耗の禁止) に関連する第 1 のオペレーション (スピリットを若く保ち、スピリットが力を回復するための修復を支援するためのスピリットについてのオペレーション) に含まれている内容である。このようにベーコンは心身二元論を採用しなかった。

5. ベーコンによる身体の二段階的把握

ベーコンは、「長生を達成するには人間の身体を、第一に生きていない、食物を必要としない何物かと考え、第二に食物を必要とする生き物 (an animate being) と考えなければならない。なぜなら第一の考慮は消耗に関する諸法則を、第二の考慮は修復に関する諸法則を付与するからである」と述べる (規範 4 解説)。

この身体の二段階的把握に関して、マクロのレベルで食物を必要としない状態を生きていない (inanimate) 状態と呼び、それを必要とし、生活している状態を生き物 (an animate being) とベーコンは呼ぶ。この定義に従えば、死んだ人間の身体は生き物ではなく、その個別の臓器・組織もすべて生きていない。一方、食物を必要とする生き物としての人間の中の個別の臓器・組織自体は、マクロのレベルで食物を必要としない状態にあるという意味において、すべて生きていない状態と呼ぶことになる。このようにベーコンは食物を必要として生活している状態が生き物であり、生きていることと等価であると考えている。

個別の臓器・組織の持続 (endurance) と人間個体としての持続 (endurance) の 2つに分けて考える必要性をベーコンが強調する理由は何なのか。それは、人間の長生には食物を必要とする修復の諸原則だけでなく、食物を必要としない消耗の諸原則も重要であるこ

とを強調するためであったと思われる。そして食物を介さない長生法は、彼の身体論によってはじめて可能になるものであった。ベーコンの身体論の特徴について、以下に要約して述べる。

人間の個別の臓器と組織の中には、例えば石の中に存在するのと同様の無生物スピリット (non-living spirits) が存在しているが、生きている個体には、それに加えて生物スピリット (vital spirits) が存在する (規範 4)。この 2 種類のスピリットは、いずれも物 (matter) であり、同様に嗜好や欲求を有している。つまり身体の中にはスピリット (訳者注：無生物スピリットおよび生物スピリット) とそれ以外の身体の部分 (parts) が存在している (規範 25 解説)。このように、ベーコンは、彼より 35 年後に生まれ、心身二元論を唱えたルネ・デカルトとは異なり、身体を機械とは考えなかったし、また身体と精神を峻別する心身二元論をとらなかった。このようなスピリットに基づくベーコンの身体論は、生活の組織化と感情の管理のように食物を必要としない長生法を可能にする。上述したように本論は、ベーコンにおける生活の組織化と感情の管理による長生法についての検討である。それは、ベーコンが新たに強調した食物を必要としない長生法についての検討である。

6. ベーコンのスピリット

生物スピリットは、スピリット (訳者注：無生物スピリット) を支配しそれと何らかの合意を持つとはいえず、統合的であり自己一貫的 (self-consistent) であるように、無生物スピリットとは随分異なっているとベーコンは述べ、そして両者は 2 つの主要なあり方において異なっていることを説明する (規範 4 解説)。

ひとつは、両スピリットの身体部分との関係における相違である。すなわち無生物スピリットは全く自己連続的 (self-continuous) ではない。いわばそれらを遮断する粗野な身体によって分断され包囲されている。一方、すべての生物スピリットはそれが充満するある種の回路を通じて、完全に遮断されることがなく、自己連続的である。さらにベーコンは生物スピリットには、また 2 種類あることについて説明する。ひとつは枝分かれして糸様の管を通過する生物スピリットである。もうひとつの生物スピリットが動物の中に存在しているように、これは植物の中の生物スピリットであると思われる。

動物の中の生物スピリットについてベーコンは以下のように説明している。「これは、加えて室 (a cell) を持っていてそれゆえに単に自己連続的であるだけでな

く何らかの陥凹 (hollow space) に集積して、身体の割には相当量あり、この室の中にはそこから枝分かれしてゆく細流の源がある。この室は主に脳室 (the cerebral ventricles) の中にあるが、下等な動物では狭いので、切断されても個々の部分がなお動く蛇や鰻や小虫において観察されるように、スピリットは室の中に濃縮されているよりも全身にわたって拡散しているように見える。鳥もまた小さな頭と小さな室を持つために断頭後もしばらく跳びまわる。しかしより高貴な動物とりわけ人間はより大きな室をもつ。」

このようにベーコンが説明する動物の中の生物スピリットの特徴は、動物の中樞神経系の比較解剖学的観察と切断実験の結果に基づいているように思われる。実際、ベーコンは、スピリットは、空気からその容易で繊細な刻印と受容を得て、炎からそのより高貴で力強い運動と行動の容量を得ると述べている (規範 32 解説)。この説明は、感覚神経系と運動神経系の働きを思わせる。さらにベーコンは、スピリットは、肉体および脳の中に通じる細い動脈の新鮮で明るい血液によって修復されると述べている (規範 32 解説)。これも、動物における生物スピリットは、中樞神経系と末梢神経系の働きと密接なかわりがある存在であることをうかがわせる。

両スピリット間のもうひとつの相違についてベーコンは、生物スピリットが何らかの燃焼 (inflammation) を備えていて、丁度動物の体液が油と水の両方を含むように、炎と空気から作られている息 (a breath) のようであることに帰している。そしてこの燃焼が、特殊な運動 (motions) と機能 (faculties) をもたらすことを、燃焼性の煙霧 (inflammable fume) の二面性に喩えて説明する。すなわち発火する前の燃焼する煙霧は、熱く、薄く、流動的である。しかしいったんそれが炎になってしまうと別物である。さらにベーコンは、生物スピリットの燃焼をワインなどのスピリットに由来する炎の性質と比較して、「ワインやその他のもののスピリットに由来する最も柔らかい炎よりも、多くの点において、より穏やかであり、加えて空気物質と相当に混合されているので、それは空気其自然 (the airy nature) と炎の自然 (the flamy nature) の神秘的な結合 (a mysterious union) である」と説明する。

7. 長生の最大の障害とその克服

上述したように、3 つの意図すなわち消耗の禁止、修復の完遂、老化現象の刷新を 10 のオペレーションに展開することで、人の身体の長生法を実現しようとするベーコンは、消耗と修復がともに熱の働きである

という複雑化 (the complication) (訳者注: 対処を困難にするもの) が、長生の最大の障害であると述べる (規範 29)。

複雑化についてベーコンは、「ほとんどすべての偉大な働きは、自然の複雑化により消滅する。なぜなら一方向では役立つものが他方向では有害であるからである。このことはバランスのとれた判断 (balanced judgement) と熟練の実践 (skilful practice) を要するが、それを私は、現状が許す限りにおいて、良性熱を有害熱から分け、両者に寄与するものを分けることによって達成した」と説明する。

良性熱を有害熱から分ける方法とはどういうことか。ベーコンは、規範 11 において、物質の中のスピリットの濃縮 (condensation) は長生によいと述べたうえで、濃縮されたスピリットは熱の 4 つの特質をすべて獲得すると解説する。その特質は、①瞬時にではなく、ゆるやかに温め、②極度に強くなく穏やかで、③均一であり不規則でなく、すなわちぱっと燃え上がらず、そして次第に消えてゆき、④それに対抗するものに会っても、容易にはくすぶったり弱まったりしないことである (規範 10 解説)。この熱の 4 つの特質は、薪ストーブにおける高密度の木質を持つ太い焚き木の燃え方を髣髴とさせる。ベーコンはこの 4 つの熱の特質をもつ熱を、良性熱、壮健な熱 (robust heat)、あるいは建設的な熱 (constructive heat) と呼び、そうでない熱を有害熱、獷猛な熱 (predatory heat) と呼んでいる。このようにベーコンのスピリットを若く保持しそれを回復する方策は、スピリットに前者の熱を付与するものであり、それはスピリットを濃縮するものである。それはスピリットをいわば高密度の木質を持つ太い焚き木のようにすることである。

スピリットの濃縮の反対は、スピリットの拡散と脱出である。ベーコンは、スピリットの本質は前者にあって後者にはないことを説明する。すなわちスピリットは、取り巻いている身体の反感 (the antipathy) によってイラつかせられないなら、身体に似すぎることによって食まれる (grazed down) ことがないなら、外側の身体によって脱出をそそのかされたり刺激されないなら、脱出しようとして大騒ぎはしないと述べる (規範 16 解説)。そしてスピリットが脱出するならば、その脱出は機械的なメカニズムではなく、スピリットの嗜好 (the appetite) と空気の嗜好 (the appetite) に由来する二重の行為であるとベーコンは述べる (規範 18 解説)。

このようにベーコンのスピリットを若く保持しそれを回復する方策は、スピリットを濃縮して、スピリットの拡散と脱出を防止することである。それは、機械

的なメカニズムに基づいた方策ではない。スピリットの嗜好に合っており、それゆえにスピリットが喜ぶことに基づく主体的かつ全人的な方策である。

8. スピリットの若さの保持とその回復による長生

長生のために、スピリットを若く保持しそれを回復するオペレーションをじっくりと考えてきたとベーコンは述べる (HVM 271)。そしてその理由として、医師も他の著述家も大抵はそれを黙してやり過ぎていること、およびスピリットへのオペレーションとその回復へのオペレーションは、長生への最も容易かつ直接的な路 (route) であることを挙げる。この説明は、“生と死の自然誌”の前置きにおいてベーコンが述べている便利な (convenient) 長生法であることと呼応している。直接的である理由としてベーコンは、スピリットが直接的に身体に働くこと、そして蒸気 (the vapours) および感情 (emotions) がスピリットに直接的に働くことを挙げる。ベーコンは、蒸気と感情のスピリットへの直接的でスピーディーなオペレーションを、食物 (aliment) によるゆるやかで遠回りのオペレーション (規範 19 解説) から区別する。

ベーコンの長生法の新しさのひとつは、身体にはスピリット (spirits) と身体部分 (parts) が含まれるという身体観に基づき、従来の医学における生活法の中心であった食物によるゆるやかで遠回りの身体 (the body) への働きに加えて、身体部分に直接働くところのスピリットに対して直接にかつスピーディーに作用する蒸気と感情の働きを採りあげていることである。

ベーコンは、規範 19 解説において、「スピリットの自然 (the nature of the spirits) は、いわば人間身体の回転 (the human body turning) における他のすべての歯車を保持する主歯車 (the chief cog) である。それゆえに主歯車は長生の意図との関係では第一位に立つ。それでより容易でより速い路で進行するほうがよい。それは他の経路 (引用者注: 食物) を取らずにスピリットを変える (alter the spirits) ことである」と述べる。このようにベーコンは、スピリットを人間身体の他のすべての歯車を保持する主歯車と位置づける。しかしこの歯車の喩えは、機械的身体論に基づくものではない。なぜなら上述したように、スピリットは、物 (matter) として嗜好や欲求を有しているからである。ベーコンは、従来のように身体部分を若く保持しそれを回復するオペレーションだけでなく、スピリットを若く保持しそれを回復するオペレーションを介して長生を達成することを考えてきた。身体の中にスピ

リットと身体部分を区別する身体観は、スピリットに基づいた長生のための生活法を創造することを可能にした。ベーコンは、古代ギリシアのヒポクラテスに遡る主に食物を介した生活法の歴史において、身体の神経系の生理学的な機能の理解の進展に呼応して、身体の内発的な主体性を介する方法を新たに追加した。

9. 心の状態から身体のスピリットの状態を理解する

スピリットを若く保持しそれを回復するオペレーションを実行しようと思うならば、自身のスピリットの状態を理解することが必要になると思われる。この点に関して、ベーコンは、自分のスピリットがよい、静かな、健全な状態にあることは、心の平安 (peace of mind) と機嫌の良さ (cheerfulness) から判断することができる」と述べる。そしてスピリットの状態が落ち着きなく (restless) 機嫌の悪いもの (ill-disposed) であることは、寂しさ (sadness)、不活発 (dullness)、その他の心のすぐれない状態 (other indispositions of mind) から判断することができると述べる (HVM 269)。

興味深いのは、ベーコンにおいては身体のスピリットを介して心と身が密接に関係していることである。上述したように、現代の諸科学のパラダイムであり続けているデカルトの精神と身体を峻別する心身二元論においては、心は心、身は身としてそれぞれ独立した存在であり、心と身の関係は想定されていない。心の状態からスピリットの状態を理解することは、心と身が密接に関係していることを前提としてはじめて可能になる。しかしそれは意識状態から無意識状態を理解することではない。また、表層心理から内奥の深層心理を理解することでもない。なぜなら無意識や深層心理は、身体と精神を峻別する心身二元論に基づくことで、身体から独立している心の内部構造の要素であって、身体にかかわる心理要素ではないからである。

「自分のスピリットがよい、静かな、健全な状態にあると感受するときには、スピリットを強化してそれを変化させてはいけない。しかしもしスピリットの状態が落ち着きなく機嫌の悪いものならば、人は直ちにそれを圧倒して変更しないとイケない」とベーコンは述べる (HVM 269)。ここで明確に理解しないとイケないことは、ベーコンは決して心の平安と機嫌の良さを強化してそれを変化させてはいけないとは言っていないことである。また、寂しさ、不活発、その他の心のすぐれない状態は直ちに圧倒して変更しないとイケないとも言っていないことである。強化され維持されな

いとイケないのは、よい心ではなく、よいスピリットであり、削減して変更しないとイケないのは、悪い心ではなく、悪いスピリットである。

ベーコンは、感情を抑制したり、中庸に食事をしたり、セックスを控えたり、中庸に労働したり、賢くリラクセスすることでスピリットは同一状態に保持され、反対に、強い感情、重い饗宴、セックス過剰、労働過剰、根を詰めた研究と取引によってスピリットは圧倒され変更されると述べるとともに、人は機嫌よく自身に満足しているときには、饗宴、セックス、労働、議論、取引にふけることに慣れ親しんできたが、長生を望むなら反対のことをしないとイケないと述べている (HVM 269)。

ふけることへの戒めについて、たとえば変化する心の状態を速度とすると、スピリットの状態の変化はその速度を生み出す加速度と考えることができる。慣れ (慣性) のために心の状態ではスピードが減じていないように思われても、スピリットにおける加速度はすでに減じていて、スピリットは落ち着きなく機嫌の悪いものになっている。このように自身の心におけるスピードすなわち満足を基準にしていると、心の状態から察知したスピリットの状態を基準にする場合と比べて、加速度の変化への対応が遅れる。そしてその必要性に気づいたときの修正の試みは、タイミングが遅れているために大きな力を必要とするため、過剰な反応をもたらすことになると思われる。ベーコンは、心の慣れに流されてしまわないように、心の状態から察知したスピリットの状態を指標にするよう勧めている。スピリットの状態の認知に基づく行動を行うことで、機に依じて立つことができると言っているように思われる。長生への最も容易かつ直接的な路であるスピリットへのオペレーションとその回復へのオペレーション (HVM 271, 273) は、心の状態からスピリットの状態を察知することから始まる。

10. スピリットの嗜好に基づいた生活の組織化

(1) 賞賛と非実働的内省

ベーコンは、賞賛 (admiration) と非実働的内省 (idle reflection) が長生のためにすばらしいのは、それらがスピリットを好きな仕事に巻き込んで、荒れ狂い落ち着かない困難な状態に帰結するのを止めるからであると述べる (HVM 267)。そしてその例示としてデモクリトス、プラトン、パルメニデス、アポロニウスのような、スピリットをうっとりさせる (entrance) 多くの素晴らしい物を持っていた自然物の観想者 (con-

templators of natural things) を挙げている。またゴルギアス、プロタゴラス、イソクラテス、セネカのような修辞家 (rhetoricians) を挙げ、彼らはものごとの単なる味わいを楽しみ (enjoyed a mere taste of matters)、物の暗さよりも言葉の明るさを追究したと述べる。さらにおしゃべり好き (the loquacious) は、スピリットを困惑させたり悩ませたりしない非実働的内省 (idle reflection) を示すと説明する。

上述したように生物スピリットは、中枢神経系と末梢神経系の働きと密接なかかわりがある物 (matter) であるならば、これらの例示は副交感神経活動が優位の状態での活動状態に相当する。一方、ベーコンは、微妙で、重大で、鋭利な探究は短命をもたらすと述べる。その理由は、これが非実働的内省の対極にある状態であることから、スピリットを困惑させたり悩ませたりすることにある。この状態は、緊急事態における交感神経の活性化状態に相当する。そうするとスピリットを好きな仕事に巻き込むためには、第一に交感神経による緊急事態反応を起こさないことが必要である。そしてもし交感神経の活性化が起きたときには、それを認知的行動によって支援してバランスをとることが必要になる。これが、落ち着きなく機嫌の悪いスピリットの状態を直ちに圧倒して変更する (HVM 269) ことであると思われる。

またベーコンは、スピリットの拡散は、過剰労働、過剰感情、過剰発汗、過剰排泄、温浴、過剰かつ時機を得ないセックスにより引き起こされ、同様に過剰心配、不安、過酷な中吊り状態や、最後に悪性疾患、激烈な身体の疼痛により引き起こされると述べる。

これらがスピリットの拡散を引き起こすということは、上述したように、スピリットの嗜好に合ったことでもなく、スピリットが喜ぶことでもない。この状態も、緊急事態における交感神経の活性化状態に相当するように思われる。とりわけ過剰な心配、不安、過酷な中吊り状態や、悪性疾患に伴う激烈な身体の疼痛は、現在の生命を脅かす疾患の医療や緩和医療・緩和ケアにおける患者・家族のクオリティーオブライフ (QOL) の重大な問題である。このような臨床の場においても、スピリットを好きな仕事に巻き込むために、交感神経による緊急事態反応を起こさないこと、そしてもしそれが起きたときにはそれを認知的行動によって支援してバランスをとることで、落ち着きなく機嫌の悪いスピリットの状態を直ちに圧倒して変更する (HVM 269) ことが重要であると思われる。また生命を脅かす疾患の早期からの緩和ケアの原則は、患者・家族およびケア従事者の双方が、お互いによりスピリットは、強化してそれを変化させてはいけませんが、

悪いスピリットは枯渇して変更しないといけない (HVM 269) という観点からアプローチする原則であると解釈することができる。

(2) 日常茶飯事と新規

ベーコンは、日常茶飯事には飽きが出るまで従うことをせず、そうしたいという強くて旺盛な欲求を感じる前に新規を採りあげるということをしないならば、スピリットの活気 (the spirit's vitality) はすばらしく増強されると述べる (HVM 269)。それゆえに、嫌気がさす前に日常茶飯事をやめ、強くなって熱望するまで新規への嗜好を抑制する一定の判断と分別 (a certain judgment and discretion) が必要であるとベーコンは述べる。

これは、スピリットの嗜好に基づく認知的行動の必要性についての表明である。さらにベーコンは、生活は、多くの多様な刷新 (many and varied renewals,) をもち、スピリットは同じことへの際限のない集中から不活発にならないように、可能な限り組織されないといけない (be organized) と述べる。これは、このスピリットの嗜好に基づいた認知的行動が、日々用いる通常的生活法になることの必要性の表明である。このような身体の状態を観察する生活法は、外的なストレス要因に振り回されているととらえやすい現代人にとってこと、その必要性があるように思われる。

(3) 老人における思い出の反芻

ベーコンは、老人はしばしば子供時代と青年期の行いを思い出して反芻することによって、スピリットを慰めないといけない (comfort) と述べる (HVM 269, 271)。これはどういうことか。ベーコンは、そのような回顧は、全ての老人の特別な娯楽 (a particular recreation) であると解釈する。それゆえに彼らは学校と一緒にいった仲間や教育を受けた現場を訪問することを好むと述べている。

老人を敬うという意味での敬老という言葉は、老人の身体と精神が分離する心身二元論のパラダイムでは、敬う対象が2つに分離するために明確さを欠いているように思われる。もし敬老を老人のスピリットを敬い慰めることであると把握するならば、敬老の対象を明確に意識することになり、敬老の表現がより具体的なものになると思われる。

(4) よりよい状態への着実な進行

ベーコンは、「スピリットをとりわけ喜ばせることは、よりよい状態への着実な進行である。それゆえに青年期と壮年期は老年期に新たな慰めを残すように組

織されないといけない」と述べる (HVM 271)。

この表明についていくつかの要素に分けて検討してみる。第一は、よりよい状態への着実な進行がスピリットをとりわけ喜ばせることについてである。スピリットのよりよい状態への着実な進行は、上述した濃縮されたスピリットが有する熱の4つの特質についての過程である。なぜなら熱の4つの特質は、瞬時にではなく、不規則でなく、極度に強くなく、ぱっと燃え上がらず、ゆっくりと温め、穏やかで、均一で、次第に消えてゆき、それに対抗するものに出会っても、容易にはくすぶったり弱まったりしないという、まさに着実な進行を示すからである。第二は、着実な進行のためには、身体的に退行してゆく老年期になる前すなわち青年期と壮年期において行う人生全体の組織化の必要性である。第三は、老年期に新たな慰めを残すということである。上述したように、子供時代と青年期の行いを思い出して反芻することはスピリットを慰める。しかしこれらは反芻による慰めであっても、新たな慰めの創造ではない。老年期に新たな慰めを残すということは、青年期と壮年期には敢えて実施しないで、老年期の生活において実施するように残しておくことである。その主要なものは、ほどほどの容易さ (moderate ease) であり、この線での主要な楽しみは、文学と次には建築とガーデニングへの情熱であるとベーコンは述べる。このようにスピリットを喜ばせることに基づいた生活の組織化は、よりよい状態への着実な進行という一貫した主体的な人生の展望と密接に結びついているアイデアである。一方、精神と身体を峻別する心身二元論や身体機械論からは、人生全体を踏まえた展望を得ることは困難であろう。

(5) 善意で採りあげられる行為、競争、労働

同じ行為、競争、労働が、善意 (good will) で採りあげられるとスピリットを元気づけるが、嫌悪があり (revulsion) 意思に反する (against one's will) とスピリットを消耗し (consumes the spirits) 打ち倒す (lays them low) とベーコンは述べる (HVM 271)。

これは、同じ行動 (行為、競争、労働) が、どのような認知の下で行われるかによって、スピリットに正反対の影響を及ぼすということである。なぜなら善意での行動は、スピリットに正の影響を与えるが、嫌悪があり (revulsion) 意思に反する行動は、スピリットに激しい負の影響を与えるからである。スピリットは、善意の行動を喜ぶが、嫌悪があって意思に反する行動を喜ばないからである。それゆえにベーコンは、長生のための2つの方策を挙げる。ひとつは、制限されないで思い通りに導けるように人生を組織する技量

を持つこと (the skill to organize his life) である。もうひとつはどのような運命が訪れようが引きずられないで彼を導くようにその心を従順にすることである。前者の方策は、認知的行動によるという意味において、いわば自力の方法であり、後者は感情の管理と諦念によるという意味において、いわば他力の方法である。いずれの方法であっても、スピリットが礎をなしている。そして前者はスピリットのために認知的行動を実施することであり、後者はスピリットのために感情の管理と諦念を実施することである。

11. 感情の管理

(1) 希望の管理

「すべての感情のうち、希望がもっとも有益で長生におおいに寄与する、ただしそれがあまりにも失望されず、見込みのある期待 (fair prospects) でその空想 (the fantasy) を養うならば」とベーコンは述べる (HVM 267)。これはどういうことか。まず希望は感情である。しかしベーコンは決して希望自体が無条件にかつ最も有益な感情であるとは言っていない。つまりスピリットに直接影響を及ぼす感情の管理のなかでは、希望があまりにもしばしば期待を裏切らないならば、希望が最も有益であると言っている。これは、希望という空想をほどほどの見込みのある期待で養うことができよう。ベーコンは、人生の中に目的やゴールを設計し設定して常にすこしずつそれに向かって働く人は一般的に長生すると述べた後で、「しかしそれは希望の高みに到達して期待するものもはや何もないときには、生の喜び (their joie de vivre) が枯渇して長持ちしないやかたである」と書きを加えることを忘れなかった。希望の喜び (the joy of hope) は、薄く広げることができるので金で作られた金箔のようであるとベーコンは総括する。このように希望の管理は、金箔のように希望の喜びを薄く広げることであると表現することができるであろう。

(2) 胃の口の管理

感情の管理において特別のケアが胃の口 (the mouth of the stomach) に行われ、とりわけ弛緩し過ぎないようにする必要があるとベーコンは述べる (HVM 271)。その理由として、強い蒸気 (powerful vapours) 由来のものを除いて、この部分は心臓や脳よりも、感情 (とくに日常的感情) により大きな影響を及ぼすからであると述べる。強い蒸気とは何か。ベーコンは、夢、酩酊、メランコリー、楽しい情念から、そして失

神と疲労の症例において臭いがスピリットを回復させることにおいて明らかなように、蒸気は、しばしばスピリットに働くことができ、働くと言っている (HVM 247)。このように強い蒸気は臭いと対比されるものである。

感情（とりわけ日常的感情）に影響を及ぼす身体部位としての胃の口は、消化器系の入り口であると解釈すると、頭蓋脳と比較したときの消化器系の神経網である内臓脳に相当すると解釈することができる。内臓脳は、ウエルバッハ神経叢とマイスナー神経叢とからなり、消化管の働きを調節する腸管神経系である。それは頭蓋内の脳である頭蓋脳に次いで良く発達しており、しかも頭蓋脳と内臓脳には脳腸相関（腸脳相関ともいう）があることが知られている。また、いろいろな感情や情動を表現するときに、「腹黒い」「腹が立つ」「腹の内を探る」「腹わたが煮えくり返る」「吐き気を催す」「虫酸が走る」「飲めない（話）」「喰えない（奴）」、「むかつく」など、消化器系に関係する言葉が使われていることは、内臓脳の働きが感情と深い関係にあることを示している。

(3) 喜び

ベーコンは、喜びについて3つの表明をしている (HVM 265)。第一は、大きな喜び (great joys) はスピリットを希薄にし、拡散させるが、通常の幸せ (ordinary happiness) はスピリットを招集して散逸させない。第二は、喜びの感受された刻印は悪く、静寂において回顧される喜びや希望や想像から湧き上がってくる喜びの意識はよい。第三は、抑制されてほとんど語られない喜びは、解放され共に知る喜びよりもスピリットを慰める。

これらのうち、大きな喜びと通常の幸せは、日常性の有無と強度の大小という点において区別されている。外的に明確な感覚として付与される喜びが、内的に回顧されて湧き上がってくる喜びの意識状態から区別されている。また、個人的な内的な喜びと共有される外的な喜びが対比されている。これら3つの表明を集約すると、外的に共有される強くて明白な非日常の喜びは、スピリットを困惑させ短生をもたらす、個人的で内的に回想されて湧き上がってくる日常の喜びは、スピリットを慰め強化する、と表現することができる。

さらにベーコンは、「愛 (love) は、不運でなくしかも痛まし過ぎるものでないならば、喜びの一種であるので、私が喜びのために制定した法則に従う」と述べる (HVM 267)。

このベーコンの表明に従って、上記の喜びについての3つの表明のなかの「喜び」ないしは「幸せ」を「愛」

に代替すると次のようになる。①大きな「愛」はスピリットを希薄にし、拡散させるが、通常の「愛」はスピリットを招集して散逸させない。②「愛」の感受された刻印は悪いが、静寂において回顧される「愛」や希望や想像から湧き上がってくる「愛」の意識的状态はよい。③抑制されてほとんど語られない「愛」は、解放され共に知る「愛」よりもスピリットを慰める。そしてこれらの3つの表明を集約すると、外的に共有される強くて明白な非日常の「愛」はスピリットを困惑させ短生をもたらすが、個人的で内的に回想されて湧き上がってくる日常の「愛」はスピリットを慰め強化する、と表現することができるであろう。

(4) 悲嘆と悲哀

悲嘆 (Grief) と悲しみ (sadness) は、もし恐怖 (fear) がなくかつ過剰の苦悩 (anguish) がなければ、長生にはたらくとベーコンは述べる (HVM 265)。これはどういうことか。人生において通常の幸せが長生にはたらくように、人生につきものである悲嘆と悲しみは長生に働くものの、同じ悲嘆と悲しみに恐怖や過剰の苦悩が伴うと、もはや長生にはたらくなくなるということであろう。実際、ベーコンは、悲嘆は単純収縮からなるが、大きな恐怖 (dread) は療法 (a remedy) についての心配 (worries) と希望とを混合することで、スピリットの不安と悩み (disquiet and vexation) を引き起こすと述べている (HVM 265)。このようにベーコンは悲嘆と悲哀を大きな恐怖から区別している。

悲嘆と悲哀の大きな恐怖からの区別は、現代の悲嘆と複雑性悲観の概念を思い起こさせる。親しい人などの死別に伴う悲嘆や悲しみは、一般的に時が療法となつて癒してしていく。一方、時が療法とならない悲嘆がある。これは複雑性悲嘆と呼ばれ、長く日常生活に支障を来たす。ベーコンによる区別に基つくと、複雑性悲嘆は、悲嘆に伴う大きな恐怖や過剰の苦悩が、時が癒すことへの心配と希望とを混合することで、スピリットの不安と苦痛を引き起こしている状態と解釈することができる。このように複雑性悲嘆は、心の問題ではなく、スピリットの不安と悩みであると把握するならば、心身にまたがる全人的アプローチが必要なスピリットの苦悩状態であると理解することができる。

(5) 抑圧された怒り

抑制された怒りはまた悩み (vexation) の一種であり、スピリットが身体の体液を食物にする (prey on the body's juices) 原因となるが、それ自身に委ねられて表出された怒りは、壮健な熱を誘導する医薬のように役立つとベーコンは述べる (HVM 265)。

スピリットが身体の体液を食べ物にするとは、スピリットが有害熱、獐猛な熱 (predatory heat) を付与されるために身体に直接的に有害に働くことであると思われる。抑制された怒りは、表出されるのか、もし表出されるならどのように表出されるのか。現代人がよく口にする「ストレスを発散する」、「ストレスをためない」というストレスの外的側面についての表現は、むしろ抑圧された怒りの表出に関する身体的な問題の表現であると理解することができる。そうすると、その表現は、「抑制された怒りを発散する」、「抑制された怒りをためない」となるであろう。この新たな表現のゴールは、身体の体液を食べ物にするスピリットを直ちに圧倒して変更することであり、その方法は、それ自身に委ねられることで表出される怒りにすることであろう。

(6) 妬み

「妬みは最悪の物であり、それはスピリットを喰い物にし (preys on the spirits)、喰い物にされたスピリットが今度は身体を喰い物にする。そしてそれは絶え間なく続き、(人々が言うように) 休日を取らないがゆえになお悪い」とベーコンは述べる (HVM 267)。どうして妬みは最悪のものなのか。それは、妬みの表出が怒りのようにそれ自身にゆだねられて表出され得るものではなく、屈折した、陰湿な表出であるために、いつまでも消失せず持続するからであると思われる。それゆえに妬みの解決法は唯一つ、妬まないことであろう。

(7) 不運への哀れみ

「われわれが蒙ることがないような不運への哀れみ (pity) はよい。しかし一種の部分的同一性 (a kind of partial identification) によって哀れむ当事者に跳ね返ってくる不運はそれが大きな恐怖 (dread) を生むゆえに悪い」とベーコンは述べる (HVM 267)。

この表明における「よい」、「悪い」は、もちろん長生にとっての「よい」、「悪い」であり、それゆえにスピリットにとって「よい」、「悪い」であると思われる。いろいろなことを考えさせる表明である。

不運への哀れみがよいことは、貝原益軒の養生訓における食事をする時の五思の第四：この世には私よりも貧しい人が多いと思うこと、その第五：上古の時を思わないといけないこと、を思い起こさせる。この二つはいずれも、自分はおいしいご飯をじゅうぶん食べて飢える心配がないことはおおきな幸福ではないかとの思いに至ることを目的としている⁶⁾。また、苦難を内容とする種々のストーリーが、古くからの物語、近

代の小説、現代の映画などとして絶えることなく存続してきていることは、大きな恐怖を生まない不運への哀れみをスピリットが好むというベーコンの表明の証しであるように思われる。

一方、大きな恐怖を生む不運については、日々生死を巡る患者と家族の葛藤に曝されている緩和ケアの従事者のいわゆる燃え尽き (burnout) を思い起こさせる。なぜならこの燃え尽きは、患者・家族とケア従事者の間の一種の部分的同一性によって哀れむ当事者に跳ね返ってくる不運が生む大きな恐怖 (dread) に由来すると思われるからである。緩和ケアや終末期ケアの臨床現場では、ケア従事者の燃え尽きを未然に防ぐことが重要である。そのためケア従事者へのケアに加えて、患者のナラティブ (narrative) すなわち語りが大切にされている。なぜならナラティブは事象を叙述することであり、事象の叙述は、燃え尽きに至り得る部分的同一性の回避をもたらすからである。すなわちナラティブは、語り手である患者本人と語られる事象との同一性を分離することによって、患者とケア従事者の間の部分的同一性の分離をもたらす。このようにナラティブによる部分的同一性の分離は、患者・家族とケア従事者の双方において、不運への哀れみをそれぞれのスピリットが好むものにするのであるならば、双方の主体的な成長をもたらすと思われる。

(8) 長く持続する恥

ベーコンは、「わずかの恥の意識は、スピリットを少し収縮させ (contracts) すばやく逃散させる (dissipates) ゆえに無害である。それゆえに気後れする人々 (diffident people) は一般的に長生する。しかし深い屈辱感から湧き上ってくる長く持続する恥の意識はスピリットを窒息するまで収縮させるので、致命的である」と述べる (HVM 267)。

この表明におけるスピリットの収縮とは何か。それは、スピリットが熱の4つの特質をすべて獲得するスピリットの濃縮ではない。スピリットの収縮は、その濃縮の限界を超えて縮むことであるように思われる。スピリットが濃縮の限界を超えて収縮することは、スピリットにとって好ましいことではない。それゆえに濃縮を超えて少しでも収縮させられたスピリットは、すばやく欲求するものを求めて身体内に逃散していく。このスピリットの動きは無害である。なぜならベーコンは、「おそれらくそれ (訳者注：生命スピリット) は、欲求する何ものと接触するためにその身体の最先端に奔走する (rush) であろう、しかしすでに述べたようにそれは (訳者注：身体を) 出て行くことは回避する」と述べている (規範7解説) からである。

一方、深い屈辱感から湧き上る長く持続する恥の意識は、致命的である。なぜならそれは、スピリットの拡散を許さず、スピリットを窒息するまで収縮させるからである。

深い屈辱感から湧き上ってくる長く持続する恥の意識は、“武士道”を執筆した新渡戸稲造の思念を思い起こさせる。新渡戸は、「彼を泥棒と呼べ、然らば、彼は必ず泥棒をするやうになる」との西洋の諺を引用して、265年間続いた江戸時代には、武士以外の全ての身分は実際においては賤しめられていたために、明治になっても多くの日本人はどうせ卑しいものだから、卑しいことをしても構わないという気持ちを引きずっていたことを述べている⁷⁾。このように新渡戸にとって、明治時代の日本人の国民的な大問題は、深い屈辱感から湧き上ってくる長く持続する恥の意識であった。この状況において新渡戸が決意したことは、世界に向かっては、英語にて“武士道”を著すことで、「己に顧みて恥かしくない行いをする」という恥を知り、廉恥を重んずる伝統が日本にはあることを世界に知らしめ、日本人に向かっては、西洋と東洋の長所の結合することで、深い屈辱感から湧き上ってくる長く持続する恥の意識を脱却し、新たな人格を形成することであったとらえることができる。そうすると新渡戸によるこの新たな人格の形成は、スピリットの若さの保持とその回復のために悪いスピリットを枯渇して変更することおよびスピリットを喜ばせることに基づいて生活を組織化することを通じて、よりよい状態への着実な進行という一貫した主体的な人生の展望をもたらすことであると解釈することができるであろう。

12. おわりに

ベーコンによる長生法研究の動機は、従来の何のアウトカムをも導かない方法論を刷新して、アウトカムを導く方法論を樹立することであった。この点に関してベーコンは、彼の3つの意図が、物の核心に至り、従来の無益な騙されやすい作りごとからはかけ離れて

いることの確信を表明するとともに、後世に対しては、「私たちの継承者は、これらの意図を充足する事物に多くを付加できるが、意図自体には付加できないであろうと考える」と述べることで、彼の3つの意図の客観性と普遍性への確信を示している (HVM 239)。

本研究は、ベーコンの長生法全体のうちの生活の組織化と感情の管理に限定した吟味であった。しかしながらベーコンによるスピリットのための生活の組織化と感情の管理は、精神と身体を峻別する心身二元論にも身体機械論にも基づかないで、むしろ人間の内発的な主体性に基づいていることから、現代の諸問題とりわけ燃え尽き (burnout) など心身にまたがる人生の諸問題への新たなアプローチをもたらし得るものと思われる。

引用文献

- 1) 藤井義博. フーフェラントの医学と長生法が目指した主体—その現代医学における意義—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2014; 9: pp.13-26.
- 2) 藤井義博. フーフェラントの長生法における精神力の位置—その現代の健康教育における意義—. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2015; 10: pp.33-44.
- 3) 藤井義博. クリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラントの長生法における culture の特徴—その現代の健康教育における意義—藤女子大学 QOL 研究所紀要 2016; 11: pp.35-45.
- 4) 藤井義博. フランシス・ベーコンの“生と死の話”とクリストフ・ヴィルヘルム・フーフェラントの“マクロバイオティック”における長生法の相違. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2017; 12: pp.13-23.
- 5) 藤井義博. ヒッポクラテス医学における生活法—栄養療法の知的枠組みについての研究 1—藤女子大学紀要 (第II部) 2003; 41: pp.69-75.
- 6) 藤井義博. 貝原益軒の生活教育哲学に基づいた食育. 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2009; 4: pp.5-15.
- 7) 藤井義博. 新渡戸稲造が模索した日本人の生き方—栄養療法の知的枠組についての研究 9—. 藤女子大学紀要 (第II部) 2012; 49: pp.57-70.

The Prolongation of Life through Organization of Life and Control of Emotions in *Francis Bacon's Historia Vitae et Mortis*

Yoshihiro FUJII

(Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Science, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji Women's University)